The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	WHO西太平洋事務局ボランティア報告書
Author(s)	山内, 祐人
Citation	目で見るWHO. 2016, 60, p. 22-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86658
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

WHO 西太平洋事務局ボランティア報告書

順天堂大学大学院医学研究科博士課程　山内 祐人

Masato YAMAUCHI

1980 年 大阪府出身。2004 年 神戸薬科大学卒業。

2010～12 年 青年海外協力隊感染症対策隊員としてパプアニューギニア東セピック州保健局に派遣

2013 年 フィジー、バヌアツ、ミクロネシアにて JICA ワクチン管理技術専門家として予防接種拡大計画に従事。

2014～15 年 英国リバプール熱帯医学大学校国際公衆衛生学修士課程修了。

●はじめに

今回、2016 年 2 月から 4 月の 3 ヶ月間、フィリピンの首都マニラにある世界保健機関西太平洋地域事務局（WPRO）の結核・ハンセン病対策課にてボランティアとして様々な業務を経験した。私は薬学修士卒業後、病院薬剤師として勤務し、特に院内感染対策チームの一員

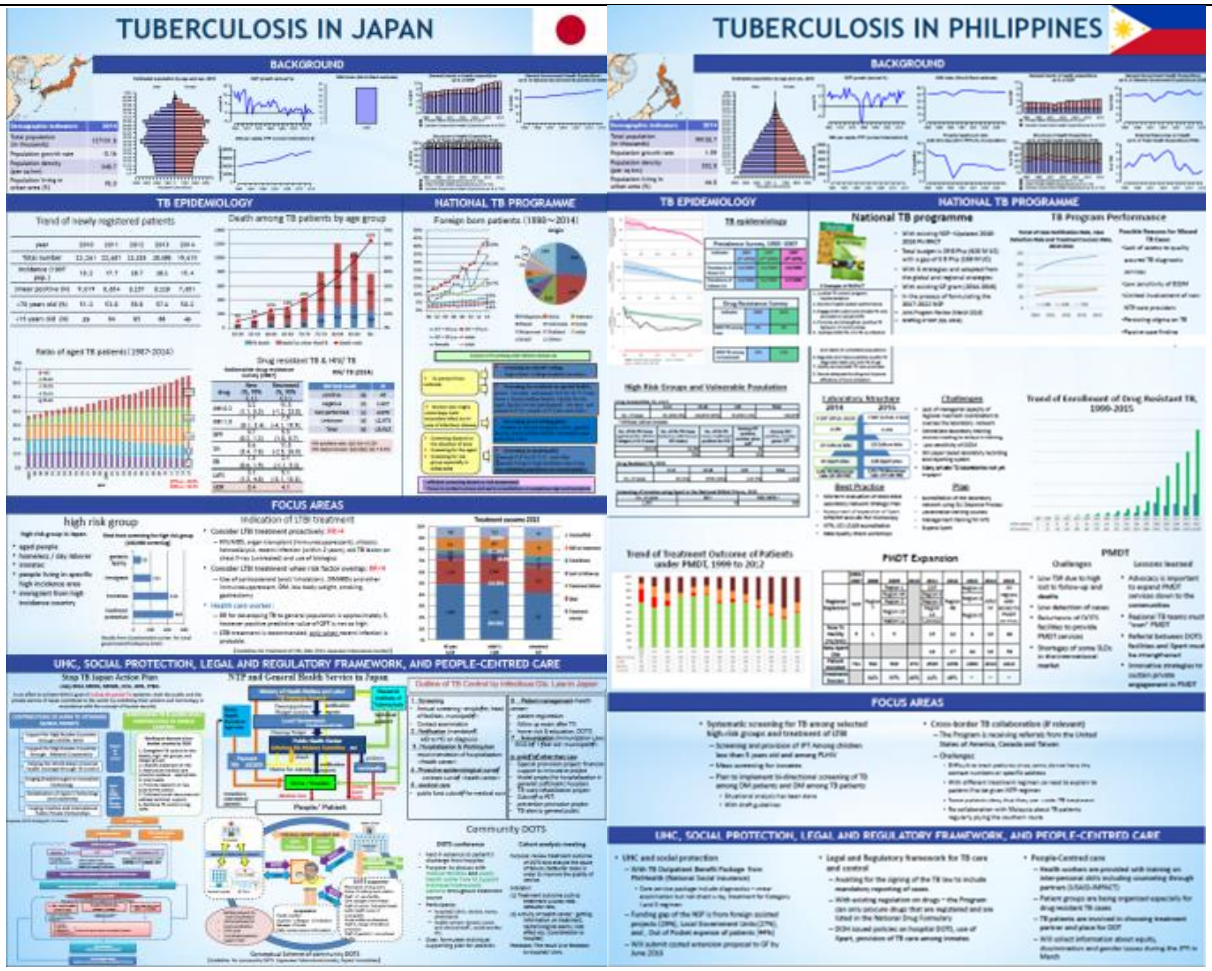

図 1　会議で展示したポスター

として院内の抗生物質の適正使用の推進に従事した。

この経験から更に酷い状況下での感染症対策に興味を持ち、青年海外協力隊の感染症対策隊員としてパプアニューギニア東セピック州にて主にリンパ管フィラリア撲滅プログラムを遂行した。JICA の短期ワクチン管理技術専門家の後、更に熱帯地域での医学・公衆衛生に関する知識と経験を求め英国リバプール熱帯医学大学校の国際公衆衛生学修士課程へ進学し、マラウィにてリンパ管フィラリア症における QOL の評価に関する研究を行った。これまで熱帯医学・公衆衛生の分野での活動は主にリンパ管フィラリアに関する事であったが、他の疾患での対策方法や取り組み方を学ぶべく WPRO では結核･ハンセン病対策課でのボランティアを行った。

●第 10 回結核対策管理者会議

3 月 1 日から 4 日間 WPRO にて結核対策管理者会議が行われ、WPRO 管轄の 37 カ国のうちから 15 カ国と各種関連機関が参加した。従来は結核の高蔓延国、中蔓延国、低蔓延国毎にそれぞれ会議が行われてきたが、今回は様々な結核蔓延状況の国を混ぜて行われた。結核対策プログラムは従来の The Stop TB Strategy から 2015 年に The END TB Strategy へと移行し、2035 年までの新たな目標が掲げられた。The END TB Strategy では新たな取組も多く、結核の蔓延の状況にかかわらず世界規模での対策が必要となっている。

この会議は非常に印象に残る点が多々あったが、特に移民の結核の問題がとても印象的であった。日本やオーストラリア、ニュージーランドのような低蔓延国でも移民による結核の持ち込みのケースが存在し、国同士が連携し、情報の交換などが必要となるが、現状は低・中・高蔓延国にかかわらず各国において情報伝達の手段や対策・政策も異なる。そのようなお互い異なった政策を持つ各国間のディスカッションを通して様々な課題が浮き彫りになって行くところが印象的であった。また、全体を通して、低・中・高蔓延国を交えて会議を行うことによって、各国同士がアドバイスし合える状況が多々見られた。各国の参加者はこの会議を通して次のステップへの新たなビジョンを得られ非常に有意義な会議となったとの意見が非常に多く、私としてもその様子を実際に主催者側で伺えたのは非常に貴重な経験となった。

この会議に向けて、私は各国から提出された結核の疫学的データや対策プログラムの状況に加えて、人口統計や社会経済に関するデータを付け加えて各参加国のポスターを作成した（図１）。作成したポスターは会議の期間中自由に閲覧出来るようにフリースペースに展示された。プレゼンテーションでは聞き逃す事もあり、制限時間があるため伝えきれない事があるが、ポスターでは各国の結核の疫学的状況や対策プログラムをじっくり確認・比較できるということで参加者から好評を得た。また、参加者から作成された自国のポスターを持ち帰って使用したいとの言葉もいただけた。

図２　第 10 回結核対策管理者会議の参加者と（筆者は下から 2 段目、右より 2 人目）

●西太平洋諸国のハンセン病疫学的レビュー

WPRO では管轄エリアのハンセン病の疫学的レビューを作成しているが、2011 年に 2008-2010 年分のレビューを発行して以来、更新されていない。そこで 1983 年から 2014 年分の WPRO の疫学的レビューの作成を行った。レビューは第 1 章の西太平洋諸国でのハンセン病の疫学的状況、第 2 章の各国のプロファイルと第 3 章のウェブ上に公開しているダッシュボードについての計 3 章構成となっており、私は第 2 章と第 3 章を担当した。

西太平洋諸国では 15 カ国でハンセン病の撲滅が成し遂げられており、ミクロネシア連邦とマーシャルではまだ 1 度も目標値を下回ったことがない状況である。キリバスでは連続した年数で目標値を下回ったことがなく、更には他の幾つかの国も撲滅目標値を下回ったがまたプレ撲滅レベルまで戻っている状況である。撲滅の目標値である人口 1 万人あたり 1 人以下の蔓延度を下回っている国でも、依然として新規患者は発生している状況である。特にフィリピンは 1998 年以降撲滅目標値を下回っているものの、未だに年間の新規患者数が 1500 人を超えており、継続したフォローアップが必要である。

担当した第 2 章の作成にあたって、各国から提出されたハンセン病の疫学データやコメントをまとめ、各国毎のプロファイルをまとめた。また、WPRO ではハンセン病の疫学的データに関するウェブベースでのインタラクティブなダッシュボードを作成しており、指定の URL にアクセスすれば誰でも閲覧可能である。各国から得られたデータによりこのダッシュボードを更新・修正し、レビューの第 3 章としてダッシュボードの紹介、使い方を記載した（図 3）。

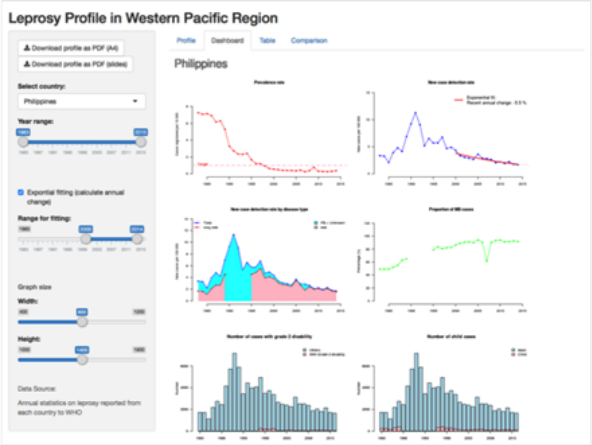

図 3　作成したウェブベースダッシュボードの一例

QOL 評価ツール	特徴・評価項目
SF-36	包括的な自己健康調査ツール。計 36 問、8 ドメイン（身体的機能、身体的制限、体の痛み、一般的な健康、活気、社会機能、感情的制限、精神的健康）。
WHOQOL-100	WHO よって作成された QOL 評価ツール。約 40 言語のバージョンが有る。計 100 問、6 ドメイン（身体、心理、自立レベル、社会、環境、精神）。
WHOQOL-BREF	WHOQOL の短縮版。計 26 問、 4 ドメイン（身体的健康、心理学的健康、社会関係、環境）。
WHODAS2.0	一般的な健康・障害評価ツール。計 36 問、6 ドメイン（理解・コミュニケーション、機動性、セルフケア、他者との付き合い、日常生活、社会参加）。
DLQI	皮膚科疾患を対象としたヘルス関連の QOL 評価ツール。計 10 問、6 ドメイン（個々の症状や感じ、日常活動、レジャー、仕事、学校）。
LFSQQ	リンパ管フィラリア症を対象とした QOL 評価ツール。計 44 問、7 ドメイン（モビリティ、セルフケア、日常活動、疾病による負荷、痛み・不快さ、心理学的健康、社会参加）。

表 1　代表的な QOL 評価ツールとその特徴と評価項目

●ハンセン病における QOL 評価ツールのレビューとリンパ管フィラリア症との QOL の比較

ハンセン病は感染の拡大は抑えられ公衆衛生上問題がなくなっても、障害を持つ患者のケアは継続して必要である。ハンセン病の慢性的罹患により身体に障害を持ち QOL が低下する。その QOL の低下の背景には身体的な生活制限のみならず、外観的変化による精神的なダメージ、他者からの差別、社会生活参加の低下、収入の低下などがあり、この構図は私が今まで携わってきたリンパ管フィラリア症で起こっている構図と非常に似ている。この様な背景から両疾患とも患者の QOL を評価し患者ケアへのアプローチに貢献する研究が多く実施されている。そこで、それらの研究についてシステマティックレビューを行い、一定条件の検索ワードを用いて複数のデータベース、またはウェブ検索にて論文を検索、採用基準に準ずる論文をピックアップしどのような対象患者にどの QOL 評価ツールを用い、どのような値が出ているかをまとめた。そして、ハンセン病患者における QOL とリンパ管フィラリア症患者における QOL と比較した。なお、このレビューは現在継続して取り組んでいる途中である。

●おわりに

今回初めて結核・ハンセン病対策の業務をボランティアとして経験した。今まで熱帯地域におけるフィラリア、マラリア、HIV/AIDS、EPI と様々な疾病対策を経験してきたが、また多くの新たな知見を得られた。3 ヶ月間を通して、結核・ハンセン病の様々なデータやグローバルプログラム、疫学的特徴のような疾病対策における重要項目について学べ、また、データ分析や図表を綺麗に見せるコツなどについても非常に多く学んだ。更には、国際機関としての各国の政府機関に働きかける役割、全体で起こっている事を把握し先を読んで立案する重要さを体感した。各国の疾病対策に対するモチベーション向上や国同士の連携の強化の大切さ、大規模の会議を実施する上での工夫・アイデアの重要さも学べた。今回の経験は今後どのような業務においても応用できる経験であると思われる。

最後に今回のボランティアにおいて終始ご指導・ご鞭撻頂いたスーパーバイザーの錦織信幸先生はじめ、WPRO 結核・ハンセン病対策課の皆様、（公社）日本 WHO 協会様、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

図 4　インターン/ボランティアと Regional Director（左から 5 人目が Regional Director、筆者は右から 2 人目）